

きしむ 親子

自立の経験伝えたい

明日への一歩⑤

「そろそろ一人で生活できるといえないか?」。2009年夏、東京都内の自立援助ホームの職員に勧められ、大高勇二さん(23)は言葉に詰まった。当時、19歳。20歳になればホームを出なければならぬ。貯金は約70万円しかなかったが、「もう少しさせて」とは言えなかった。

5歳の頃、父親が亡くなった。家賃6万円と生活費を払うだけで精いっぱいだった。自立援助ホーム、未成年者が職員の指導を受けて就職活動するなど、自立を目指して共同生活を送る施設。国や自治体から補助を受け、非営利組織などが運営している。児童養護施設などは原則18歳未満が対象で、施設を出た人が入るケースが多い。昨年10月現在、113施設で430人が暮らしている。

「この奨学金がなければ、私は大学に通えません。12年春、ワシントン州。州議会議員の前で、ジャニス・コールさん(23)が訴えた。薬物中毒の両親から引き離され、5歳でおじ夫婦に預けられた。そこでも虐待を受け、自殺も考えた。15歳の時、いとこの女性が里親になってくれた。

施設などの仲間で正社員として働く人は誰もいない。「勉強が未来につながるなんて、誰も教えてくれなかった。将来のことなんて考えられない」

米国では、里親家庭に育った若者が立ち上がり、同じ境遇の子どもたちを救う活動を始めている。

*

「この奨学金がなければ、私は大学に通えません。12年春、ワシントン州。州議会議員の前で、ジャニス・コールさん(23)が訴えた。薬物中毒の両親から引き離され、5歳でおじ夫婦に預けられた。そこでも虐待を受け、自殺も考えた。15歳の時、いとこの女性が里親になってくれた。



卒業式を終えた畑山さん。今後は「後輩の力になりたい」と意気込む(18日、兵庫県西宮市の関西学院大学で)

99年にワシントン大に進学。大学や州政府から奨学金を受け、学費は一切かからなかった。何より助かったのは「大学へのパスポート」と呼ばれる、里親家庭で育った若者を対象にした返済不要の奨学金だった。

「大学へのパスポート」は当時、いつまで続くかわからない試験的な取り組みだったが、コールさんの訴えに州議会が動き、制度として導入が決まった。

大学を卒業した今、里親家庭で育った若者らでつくる民間団体「IFCA*」に所属し、同じ境遇の仲間に向けて自らの経験をブログで発信するなどしている。

「私は偶然、教育という成功の手がかりをつかめたが、多くの子には支援が届いていない。生活を変えるために、私たちが自身が声

を上げる必要がある」と述べた。日本でも、「発信」を始めた若者がいる。

「施設や里親家庭を出た後、頼れる人がいない子もいる。自立を支える制度を作ってほしい」。昨年9月、大阪市で開かれた里親に関する国際会議。18歳まで児童養護施設で育った畑山麗衣さん(22)は訴えた。

進学を相談した時、施設職員は「借金を背負うだけだ」と反対した。諦めきれず、奨学金を受けて関西学院大に進学。4年間で600万円の借金を抱えたが、「多くの人や考え方に接し、何ものにも代え難い充実した時間を過ごせた」。

ただ、自分のようなケースはまれだ。全高卒者が大学などに進学する割合は7%

%に対し、施設や里親家庭で育った子の割合は25%と大きく下回る。「施設出身の子が何に困っているのか、世間は知らない。声をかせない仲間の分も、自分が出せない仲間の分も、自分が伝えたい」と思うようになった。

4月から若者の自立支援に取り組み一般社団法人の職員として働く。6月にIFCAの一員として渡米し、当事者団体との交流を通じて日本に足りないものを学ぶ予定だ。

「子どもたちの未来を広げたい」。それが自分の役割だと信じている。

(おわり)

この連載は稲垣信、杉浦まり、井上陽子、小坂佳子、斎藤圭史が担当しました。

*IFCA=International Foster Care Alliance